

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌詠みに「とられて詠みけるを、定頼中納言<sup>2</sup>たはふれて、小式部内侍ありけるに、「<sup>A</sup>丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなく思すらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、<sup>①</sup>御簾よりなからばかり出でて、わづかに<sup>②</sup>直衣の袖をひかへて、

大江山いくの道の遠ければまだ<sup>B</sup>ふみも見ず天の橋立

と詠みかけけり。思はずに、あさましくて、「<sup>C</sup>はいかに。かかるやうやはある。」とばかり言ひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより<sup>D</sup>歌詠みの世におぼえ出で来にけり。

これはうちまかせての理運のことなれども、<sup>E</sup>かの卿の心には、これほどの歌、ただいま詠み出だすべしとは知られざりけるにや。

問 二重傍線部①・②の読みを、それぞれ現代仮名遣いで答えよ。 知

答 ① みす ② のうし(なおし)

問 波線部1・2の意味を、それぞれ答えよ。 知

答 1 選ばれて 2 ふざけて

問 傍線部Aの発言について、次の問いに答えよ。

(1) 「丹後へ遣はしける人」とは誰のことか。最も適当なものを、次から選べ。 思

ア 丹後の国に下った和泉式部のこと。 イ 丹後の国司に任命された保昌のこと。

ウ 丹後から歌合に招かれた歌人のこと。 エ 定頼中納言が派遣した使者のこと。

オ 小式部内侍が派遣した使者のこと。

(2) これはどのようなことを意図した発言か。「小式部内侍」「和泉式部」「歌合」の語を用いて、四十字以内で説明せよ。 思

問 傍線部Bは掛詞となっている。一つの意味は「踏み」であるが、もう一つの意味は何か。漢字で答えよ。 思

答 (1) オ (2) 小式部内侍が、母の和泉式部に、歌合で詠む歌について指導を仰いだ(代作を頼んだ)だろうということ。(40字)

問 傍線部Cは何に対する驚きを表しているか。最も適当なものを、次から選べ。 思

ア 御簾の内側からさつと袖を捉えるという思いがけない小式部内侍の機敏な行動。

答 文

イ 御簾から半分ほど体を出して歌を詠みかけてきた小式部内侍の優雅なしぐさ。

ウ 通りすがりの定頼中納言に局の中から歌を詠みかけてきた小式部内侍の声の美しさ。

エ 定頼中納言が局の前を通りかかる間に即興で見事な和歌を詠んだ小式部内侍の機知。

オ あまりに技巧的のために定頼中納言も即座に意味を理解できない小式部内侍の和歌。

問 傍線部Dの現代語訳として最も適当なものを、次から選べ。 **思**

ア 世間の歌の名人として天皇から褒められたということだ。 **イ** 歌詠みの世界で名声が高まったということだ。

ウ 歌人の世界で生きていく覚悟が芽生えたということだ。 **エ** 歌人としての身分を公式に許可されたということだ。

オ 歌を詠む技量に自信を持つようになったということだ。

問 傍線部Eとあるが、小式部内侍に対する定頼中納言の心情を编者はどのようにとらえているか。最も適当なものを、次から選べ。 **思**

ア 軽侮 **イ** 恋慕 **ウ** 心配 **エ** 同情 **オ** 畏敬

問 次の文章は、平安時代後期の歌論書の一節である。読んで、その主張として最も適当なものを、後から選べ。 **思**

およそ名を得たる人は、なかなかの言ひ出ださむよりは、遁避する、一のことなり。

歌合あるところ、小式部内侍、歌人に入るとき、母和泉式部、保昌の妻となりて丹後の国にあり。定頼卿、小式部内侍の局に立ち寄りて戯れ言ふ。「いかに、丹後へ人は遣はし候ふや。いまだ帰り参らざるか。」と言ひてたつときに、式部、直衣の袖を取りていはく、

大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

定頼、ひきやり逃げしと云々。(『袋草紙』)

ア 定頼が、小式部内侍の詠みかけた歌に返歌もできずに逃げ去ったのは、名高い歌人の振る舞いとして情けないことである。

イ 定頼が、小式部内侍の挑発に乗らずに袖を振り払って逃げ去ったのは、名高い歌人の振る舞いとして賢明なことである。

ウ 定頼が、小式部内侍の秀歌に対して中途半端な返歌をせずに逃げ去ったのは、名高い歌人の振る舞いとして評価すべきことである。

エ 定頼が、小式部内侍を挑発した挙げ句に返歌もできずに逃げ去ったのは、名高い歌人の振る舞いとして最も恥ずべきことである。

オ 定頼が、小式部内侍を警戒してまずまずの出来の返歌すら詠まずに逃げ去ったのは、名高い歌人の振る舞いとして仕方ないことである。

**答**  
ウ

**答**  
ア

**答**  
イ

**答**  
エ

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌詠みにとら<sup>①</sup>れて詠みけるを、定頼中納言たはふれて、小式部内侍ありけるに、「A丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなく思すらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、御簾よりなからばかり出でて、わづかに直衣の<sup>1</sup>袖をひかへて、

<sup>B</sup>大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

と詠みかけり。思はずに、あさましくて、「Cはいかに。かかるやうやはある。」とばかり言ひて、<sup>C</sup>返歌にも及ばず、<sup>2</sup>袖を引き放ちて、逃げ<sup>②</sup>られけり。小式部、これより歌詠みの世におぼえ出で来にけり。

これは<sup>D</sup>うちまかせての理運のことなれども、かの卿の心には、これほどの歌、ただいま詠み出だすべしとは知られざりけるにや。

問 二重傍線部①・②の助動詞の文法的意味を、それぞれ答えよ。 知

答 ① 受身 ② 尊敬

問 波線部1・2の主語を、それぞれ答えよ。 思

答 1 小式部内侍 2 定頼中納言

問 傍線部Aの発言について、次の問いに答えよ。

- (1) 「丹後へ遣はしける人」とあるが、誰のもとに「遣はし」というのか。本文中から抜き出せ。 思
- (2) 「いかに心もとなく思すらむ」を現代語訳せよ。 思

答 (1) 和泉式部 (2) (あなたは今) どんなに待ち遠しくお思いになっているだろうか。

問 傍線部Bの和歌には掛詞が二箇所用いられている。その二箇所を含む組み合わせとして最も適当なものを、次から選べ。 思

- ア 「大江山」と「いくの道」 イ 「大江山」と「天の橋立」
- ウ 「いくの道」と「天の橋立」 オ 「ふみも見ず」と「天の橋立」
- ウ 「いくの道」と「ふみも見ず」

答 ウ

問 傍線部Cの理由として最も適当なものを、次から選べ。 思

- ア すでに局の前を通り過ぎてしまったから。 イ 都にいるのに天の橋立の歌を詠まれてあきれたから。
- ウ すぐに上手な歌を返せる気がしなかったから。 エ 戯れでなかったのに真面目に返答されて興ざめたから。

オ 歌合で詠む歌に返歌をしてはならないから。

答  
ウ

問 傍線部Dの現代語訳として最も適当なものを、次から選べ。思

- ア 普通の当然の結果であるけれども、
- イ まれに見る幸運な事柄であるけれども、
- ウ 打ち負かした痛快な出来事であるけれども、
- エ ちよつとした機転を利かせたことであるけれども、
- オ 内密に済ませようとしたことは道理であるけれども、

答  
ア

問 以下の文章は、藤原定頼に関する別の逸話である。「大江山」と本文を読んだ後の発言の中から、解釈として最も適当なものを選べ。思

水もなく見えわたるかな大堰川おほむがはきしの紅葉は雨とふれども

この歌は、中納言定頼が歌なり。一条院（\*一条天皇）の御時、大堰川の行幸に、歌詠ませられける時、四条大納言（\*定頼の父である藤原公任）、「わが歌はいかでありなん。中納言よく詠めかし。」と思はれるが、すでにこの歌を、「水もなく見えわたるかな大堰川」と詠みあげたりけるに、「はや不覚してけり。」と顔の色を違へて思はれたるに、「きしの紅葉は雨とふれども」と詠みあげたりけるに、「秀歌仕りて候ひけり。」と言ひて、顔の色出で来てぞ思はれる。『西行上人談抄』

ア 「大江山」では小式部内侍が母に歌の代作を頼んだんじゃないかと邪推しているけど、この文章では自分が父に代作してもらっているね。自分に自信がない人ほど他人を疑うんだよな。

イ 「大江山」では小式部内侍を侮った人物として批判されているけど、この文章では父も認める名歌を詠んだ人物として描かれているね。歌人としての力量は確かなんじゃないかな。

ウ 「大江山」では小式部内侍に歌を詠みかけられて狼狽しているし、この文章では下手な歌を詠んでしまったと思って顔色を変えているね。動揺が態度や表情に出やすい人なんだろうな。

エ 「大江山」では小式部内侍の歌に返歌もできず退散したけど、後日天皇の前ではその経験を生かして、地名と掛詞を織り込んだ秀歌を詠み出したね。案外素直で努力家な人なのかもしれないな。

オ 「大江山」では小式部内侍を軽く見た結果、歌人としての名声を失うことになったけど、天皇の前ですぐれた和歌を詠んで見事に汚名返上したね。歌に関しては負けず嫌いなことがわかるな。

答  
イ

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

和泉式部、保昌が<sup>①</sup>妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、<sup>A</sup>歌詠みにとられて詠みけるを、定頼中納言たはぶれて、小式部内侍ありけるに、「<sup>B</sup>丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに<sup>1</sup>心もとなく思すらむ。」と言ひて、<sup>②</sup>肩の前を過ぎ<sup>③</sup>られけるを、御簾よりなからばかり出でて、わづかに直衣の袖をひかへて、

<sup>C</sup>大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

と詠みかけけり。思はずに、あさましくて、「こはいかに。<sup>D</sup>かかるやうやはある。」とばかり言ひて、返歌にも及ばず、<sup>E</sup>袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより<sup>I</sup>の世に<sup>2</sup>おぼえ出で来<sup>④</sup>にけり。

これはうちまかせての『<sup>F</sup>理運のことなれども、かの卿の心には、<sup>G</sup>これほどの歌、ただいま詠み出だすべし』とは<sup>H</sup>知られざりけるにや。

問 二重傍線部①・②の読みを、それぞれ現代仮名遣いで答えよ。 知

答 ① め ② つぼね

問 二重傍線部③・④の助動詞の文法的意味を、それぞれ答えよ。 知

答 ③ 尊敬 ④ 完了

問 波線部1・2の意味を、それぞれ答えよ。 知

答 1 待ち遠しく 2 名声

問 傍線部Aの説明として最も適当なものを、次から選べ。 思

ア 歌合のために詠んだ和歌を横取りされたということ。

イ 歌合に出る歌人の一人として選出されたということ。

ウ 歌合で詠進した和歌が高く評価されたということ。

エ 歌合に出る別の歌人のために和歌を代作したということ。

オ 歌合に出るような高名な歌人の妻となったということ。

答 イ

問 傍線部Bを現代語訳せよ。 思

答 丹後へおやりになった人は参上したか。

問 傍線部Cの和歌にある二つの掛詞について、どの語に何と何が掛けられているかを、それぞれ説明せよ。思

答 「いくの」「に地名の「生野」と「行く野」が掛けられている。／「ふみ」に「踏み」と「文」が掛けられている。

問 傍線部Dを現代語訳せよ。思

答 「このようなことがあるのか、いや、あるはずがない。

問 傍線部Eについて、定頼中納言が「逃げ」たのはなぜか。五十字以内で説明せよ。思

答 小式部内侍がすぐにすばらしい和歌を作るとは予想しておらず、返歌を詠むこともできないほどに驚いたから。(50字)

問 空欄Iに入る言葉を、本文中から三字で抜き出せ。思

答 歌詠み

問 傍線部Fのように編者が言うのはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 小式部内侍はまだ歌人として無名ではあるが、根拠もないことからかわれたら悔しい思いをするのは当然だから。

イ 小式部内侍は歌合に出詠の準備をしていたので、定頼中納言に対してすぐに和歌を示すことができるのは当然だから。

ウ 小式部内侍は母親が歌人として有名な和泉式部であり、その後の活躍を思えば得意即妙の和歌を詠むのは当然だから。

エ 小式部内侍はその即興で作った和歌のすばらしさから考えて、後世に歌人として高く評価されるのは当然だから。

オ 小式部内侍は幼いときから母の和泉式部に歌の指南を受けており、和歌に関する深い教養があることは当然だから。

答 ウ

問 傍線部Gとあるが、編者は小式部内侍のどのような点を評価しているのか。「大江山…」の和歌の内容に触れつつ説明せよ。思

答 巧みに掛詞を織り込んで、母の和泉式部に代作を頼んだり応援を求めたりしていないことを伝える和歌をすぐさま詠んだ点。

問 傍線部Hを現代語訳せよ。思

答 お気づきにならなかったのであろうか。

問 本文の出典『十訓抄』は、説話を十の教訓に分類して整理した説話集である。本文はどのような教訓に分類されるか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 人倫を侮るべからざる事

イ 朋友を撰ぶべき事

ウ 思慮を専らとすべき事

エ 諸事を堪忍すべき事

オ 懇望を停むべき事

答 ア

■十訓抄 大江山 発展問題（比べ読み）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

歌の、八つの病の中に、<sup>A</sup>後悔の病といふ病あり。歌、すみやか<sup>1</sup>に詠み出だして、人にも語り、書いても出だして後に、よき言葉、節を思ひ寄りて、かく言はでなどと思ひて、悔い妬がるをいふなり。さればなほ、歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。いまだ、昔より、とく詠める<sup>2</sup>に<sup>3</sup>かしこきことなし。されば、<sup>①</sup>貫之などは、歌一つを、十日二十日などにこそ詠みけれ。しかはあれど、折に従ひ、事にぞよるべき。

大江山いくのの里の遠ければふみもまだみず天の橋立

これは、小式部内侍といへる人の歌なり。事の起こりは、小式部内侍は、和泉式部がむすめなり。親の式部が、保昌が妻にて、丹後に下りたりけるほどに、都に歌合のありけるに、小式部内侍、歌詠みにとられて詠みけるほど、四条中納言定頼といへるは、四条大納言<sup>②</sup>公任の子なり。その人の、戯れて、小式部内侍のありけるに、「丹後へ遣はしけむ人は、帰りまうで来<sup>3</sup>にけむや。いかに心もとなく思すらむ。」と、妬がらせむと申しかけて、立ちければ、内侍、御簾よりなから出でて、わづかに直衣の袖をひかへて、この歌を詠みかければ、いかにかかるやうはあるとて、つい居て、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、<sup>B</sup>え思ひ得ざりければ、引き張り逃げにけり。これを思へば、心とく詠めるもめでたし。

〔俊頼髓脳〕

\*節：趣向。

問 波線部1～3の「に」の文法的説明として最も適当なものを、それぞれ選べ。知

ア ナ行変格活用動詞の連用形活用語尾 イ ナリ活用形容動詞の連用形活用語尾 ウ 断定の助動詞「なり」の連用形

エ 完了の助動詞「ぬ」の連用形 オ 格助詞 カ 接続助詞

答 1 イ 2 オ 3 エ

問 二重傍線部①・②の人物が撰者となった作品を、それぞれ選べ。知

ア 和漢朗詠集 イ 菟玖波集 ウ 古今和歌集 エ 千載和歌集 オ 新古今和歌集 カ 山家集

答 ① ウ ② ア

問 傍線部Aとはどういうことか。六十字以内で説明せよ。思

答 歌を急いで詠んで人に語ったり書き送ったりした後に、よりよい言葉や趣向を思いつき、こつ詠まなくて残念だったと悔しがること。(60字)

問 傍線部Bを現代語訳せよ。思

答 思いつくことができなかったので、

問 以下は『十訓抄』とこの文章とを比べ読みした後の教室での会話である。読んで、空欄Ⅰ・Ⅱに入る最も適当な発言を、後からそれぞれ選べ。思  
教師——『俊頼髓脳』は平安時代後期に成立した歌論書で、当時の関白の娘を教育するために書かれたと言われています。「大江山」の逸話をどうとらえてい  
るか、『十訓抄』との違いについて考えてみましょう。

生徒A——第一段落では「後悔の病」について述べていて、「歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。」と自説を展開しているね。

生徒B——それに続けて「大江山」の逸話を紹介しているけど、これは小式部内侍が秀歌を即座に詠んだという話だよ。第一段落とどうつながるんだろう。

生徒C——Ⅰということをおもうとしているんじゃないかな。

生徒D——『十訓抄』の方は、「かの卿の心には、これほどの歌、ただいま詠み出だすべしとは知られざりけるにや。」と定頼への批判に力点があるけど、『俊頼  
髓脳』にはそういう主張は見当たらないね。

教師——同じエピソードでも、説話と歌論書では解釈の仕方が異なるんですね。もう一つ、平安時代後期の歌論書に『袋草紙』というものがあります。この  
中には「白紙を置く作法」というものが記されており、歌会などでどうしても歌を詠めないときは白紙を置いて退出することが認められていたとされてい  
ます。『袋草紙』ではそれに続けて「およそ名を得たる人は、なかなかのこと言ひ出ださむよりは、遁避する、一のことなり。」と書かれており、その後  
に同じ「大江山」の逸話を収録しています。この『袋草紙』の文脈では、定頼についてどのようにとらえていることになりましたか。

生徒E——Ⅱということですね。同じ逸話でも、何に焦点を当てるかで三者三様のとらえ方がされていて、興味深いなと思いました。

- Ⅰ
- ア 歌を普段は長時間かけて作っていても、即詠が必要な場面では的確に対応できるのがすぐれた歌人の条件だ
  - イ 歌を急いで詠むと後悔の病に陥りがちではあるが、時にはあえてその危険を冒さなければならぬ場合もある
  - ウ 歌を詠むのが速いか遅いかということよりも、詠んだ歌が時節や場面にならなっているかどうか重要だ
  - エ 歌はじっくり詠むほど出来がよくなることが多いが、場の状況に合わせて即興で詠む方が得意な歌人もいる
  - オ 歌は急いで詠まない方がよい結果になるものだが、時と場合によっては急いで詠む方がよい事例もある
- Ⅱ
- ア 即座に返歌をしようとせずに、時間をかけて歌を詠もうとした定頼の考え方には納得できる
  - イ 小式部内侍から詠みかけられた歌に対し、返事もせずに逃げ出した定頼は歌人としての資質に欠ける
  - ウ 急いで中途半端な返歌をすることは控えて、その場をただ立ち去った定頼の態度は称賛すべきだ
  - エ 白紙を置く作法になぞらえて、あえて小式部には返歌をせずに行ってしまった定頼は博識だ
  - オ ありきたりの返歌では歌人としての名声を失うと恐れ、小式部内侍の前から逃亡した定頼は臆病だ

答

Ⅰ オ Ⅱ ウ